みかえり　第125号

池の水　人の心に　似たりけり
濁り澄む事　さだめなければ

―法然上人御詠―

今、曙光を仰ぎ新たな時代へ躍動！

心に滲みるようなお説教を聞いたとします。その時には、私達の心は、清々しく澄みわたります。が、帰り道、普段からあまり良く思っていない人にばったり出会いました。すると、どうでしょう。先程の清々しい心は、もう嫌悪の黒雲に変わってしまいます。

どんなに平静を保とうとしても、保ちきれないのが、私どもの心というものです。信心も、信ずる傍らから、疑いの心が邪魔をします。それが愚鈍の凡夫の私どもだったのですね。

疑いが湧いても、その疑いの心のなかから、なおも念仏を称えていくことで、私達の信心は成り立っていくのです。

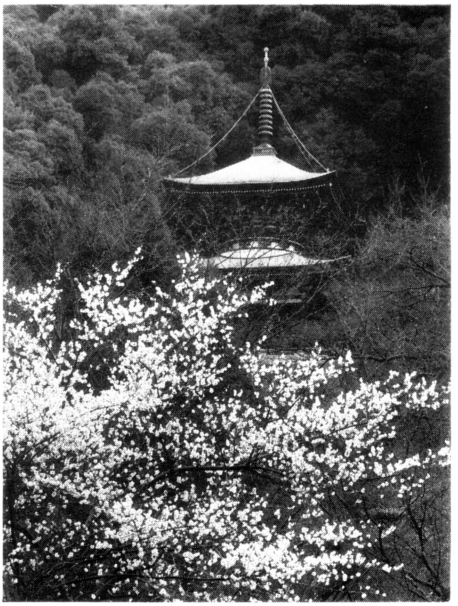
総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第127号

ゆっくり行くことを恐れるな
立ちどまることだけを恐れよ

懈怠（けだい）につけてもますます大悲を仰ぐべし

―西山上人―



梅花五辨を開いて　仏果自然に成就

冴えわたった冬の空にかかる月を眺めていても、その月が、動いているとは観じられないものです。が、時間をおいて眺めてみると月はいつの間にか、違う場所に移っています。確実に、月は動いていたのです。

私達は、自分の信心が、急に増長しないからといって、絶望することはないのです。

毎日の生活の中で、少しずつ信心を深めていきましょう。どんなにつらい事、苦しいことがあっても、決して絶望しないで、全てが自分の信仰を深める材料なのだ、と受け止めていくのです。

ある時、気付いたら、私達の信仰は、いつしか深まっていた、そういう喜びを味わいたいものですね。み仏は、いつもそんな私達を見つめていてくださるのです。

総本山　永観堂禅林寺

みかえり　第128号

『やっとかめだなも』

倶会一処

――『阿弥陀経』――

昭和六十三年四月二十日・二十一日
開山真紹僧都千百年
遠忌法要厳修
総本山　永観堂禅林寺

『やっとかめだなも』、これは『お久しぶりですね』と云う名古屋弁です。親しくしていた人々と、やっとかめに再会した時、その懐しさ、嬉しさを込めて、こう云います。

あなたは別れが苦しくて、「この人と長く一緒にいたい」と願った事はありませんか。

「会うは別れのはじめ」と云いますが、出会いと別れが人生です。しかし、いつも出会い続け、別れのないことがあります。私たちは阿弥陀さまとの出会いに、ナカ〳〵気づきません。阿弥陀さまの光明は、誰れ彼れなく、等しくふりそそがれています。

私たちは、いづれ、蓮台の上で、多くの人人と、『やっとかめだなも』と、再会出来るのです。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第129号

会ったときが別れのとき

―一期一会（いちごいちえ）―

昭和六十三年四月二十一日・二十二日
開山真紹僧都千百年

遠忌法要厳修

総本山 永観堂禅林寺

人間に生まれてきた甲斐というのは一度しかない人生を〝本当に生かす〟ことに尽きましょう。

一度しかない人生――これを〝一度きりの人生〟とみて、「どうせ短い一生だ。おもしろくおかしく太く短く、パーッと」では、いかにもシラけていて心さみしい気がします。

そうではなく、「二度とない〝いま〟を、こうして生きて巡り会える事実に驚きと喜びをこめて精一杯生きよう」との〝願い〟が、何としても欲しいですね。

総本山 永観堂　禅林寺

みんな　光っている
照らされて　生きている
赤色赤光　白色白光
—阿弥陀経—

昭和六十三年五月二十五日、二十九日五日間
開山真紹僧都千百年遠忌記念

五重相伝会厳修

総本山　永観堂禅林寺

どの子も　子どもは星
みんな　それぞれが　それぞれの光をもって　まばたきしている
ぼくの光を見てください
わたしの光を　見てください　と
まばたいている
光を見てやろう　まばたきに応えてやろう
光を見てもらえないと　子どもの星は光を消す　まばたきをやめる
光を見てやろう　まばたきに応えてやろう
そして　空いっぱいに　子どもの星を
かがやかせよう

（東井義雄）

総本山　永観堂　禅林寺

信ずるに足るものを　信ぜよ！
深心（じんしん）と申すは　善導和尚は「ふかく信ずる心」と仰せられて候なり
―西山上人―

写真　建立された禅林寺歴代法主塔

こんな話がある。昔、中国に道林（どうりん）和尚という高僧がいた。その道林に白楽天はたずねた「仏教の根本精神は何か」と。「諸悪莫作（しょあくまくさ）　衆善奉行（しゅぜんぶぎょう）　（悪いことをせずよいことをする）」と和尚は答えた。すると白楽天は失望しながら、「そんなことは三才の子どもだって知っている」と言い返すと、即座に、「実行するのは八十の翁にもむずかしいぞ」と。

私たちは、ついつい知識の理解で終ってしまう。しかし〝解（わ）かった〟ということは、おのずから心がそれに向かって発動することである。つねにみ仏の大きな力の中に生かされているということがわかれば、心よりみ仏を信じられるのである。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第132号

写真　五重相伝会（正伝法）蓮台上の受者

見ているよ　聞いているよ　知っているよ
心に仏を思えば　仏われを念じ給う

――西山上人――

子供たちと食事をしていると、汚れた指をさっと洋服でふいたり、つるっと指をなめている。「こらっ」と叱ると、不服そうな顔をして、「お父さんもしているよ」という。

癖、後姿、話し方、指の爪の形まで、親に似ていないものはない。そんな子供がなお更愛しい。

阿弥陀さまは、きっと「こらっ」とおっしゃりたいのだろうけれど、私たちのすることが、愛しくて可愛いくて、知って知らずに作っている善悪の行いも、すべてが阿弥陀さまの視野と思いのなかで、見つめられているんだね。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第133号

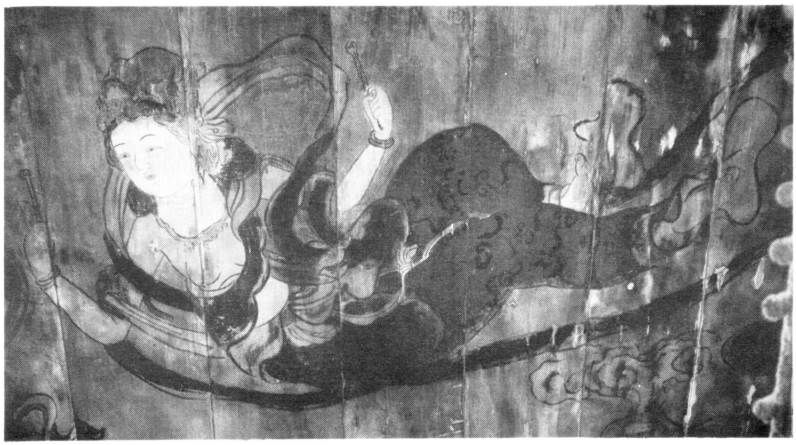


写真　阿弥陀堂の脇壇天井画〝飛天之図〟部分

よく死ぬことは
　よく生きることだ
人　生きるとき精進ならざれば
たとえば　樹に根なきがごとし
――善導大師――

再発と転移をくり返す、がんとのすさまじいまでの闘いに生命を燃やしつくし、ひとりニューヨークで死んだジャーナリスト千葉敦子さん（四六）の生きざまに、強く印象づけられました。病気を見つめて感傷に浸るより、限りある残された時間にどこまで自分のベストをつくせるか。

「死は少しも恐しくない。これまでの人生に満足しています」と、闘病日記に書かれた、生きることへの讃歌は、一度きりの人生を無為に生きる現代人への警鐘です。その千葉さんの好んだ言葉。

「よく死ぬことは、よく生きることだ」

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第134号

燃えて生きれば　人生悔いなし

我が行は精進して
忍んでついに悔いざらん

――無量寿経――

写真説明　善光寺四十八願所　三十四番永観堂〝詠歌〟扁額

〝経営の神様〟松下幸之助さんは、今年で九十三歳。人生をふり返ってこう言っています。

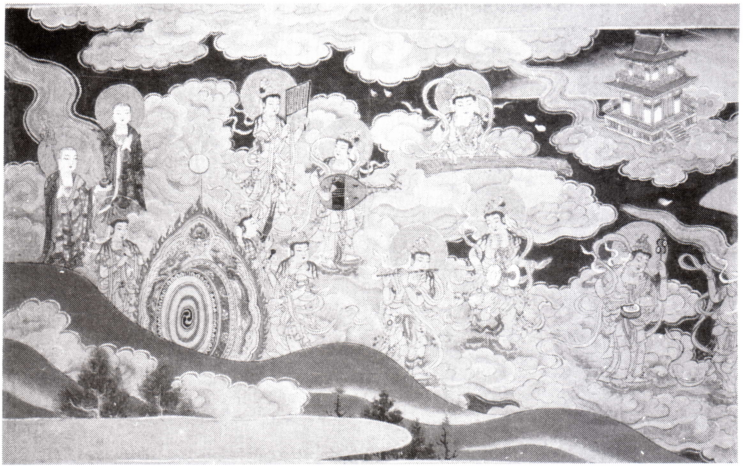
「懸命にやってきました。我ながらよくよくやれたと思います。自分で自分の頭をなでてやりたいですよ。

失敗しながら成功し、成功しながら失敗してきたのが、自分の人生だったように思われますね。結果として、八勝七敗で勝ち越したかなあというところです。全力を尽くしたのだから、これで満足しなければ……と思っています。」

聞　なむあみた(だ)と　は(ば)かり
名　　きくそ(ぞ)身をかへ(え)ぬ
得　この世なか(が)らの
忍　　ほとけなりけり

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第135号



写真説明　重要文化財　融通念仏縁起（部分）　伝土佐光信筆

からだ健やか　こころ康らか

聞法を得たるが故に

顔色和悦せり

――観　経――

医学の急速な進歩と十分な栄養によって、私たちの寿命はのびた。身体は健康になったが、その反面、心はどうであろう。心にも十分な栄養をとっているであろうか。

健康とは、身もさることながら心が健やかで康らかなことだ。

心の栄養とは何でしょう。それは真実の教えを素直にいただくことです。

総本山　永観堂　禅林寺

写真説明　阿弥陀堂　脇壇天井画〝飛天之図〟（左部分）

たいせつにしていますか　父と母

存亡ともに　孝行を致すべし

―西山上人―

わたしたちは、父と母の十のご恩に恵まれて、このように大きく育てていただいた。数えきれないほどのご恩の数を、たった十にまとめてみると、そのうち七つまでが幼い頃のご恩だという。ひとりだちできない幼な子は、両親の愛をいっしんに受けて育つんだということが、よくわかる。

私がもっとも申しわけなく思うのは、十番目の「究竟憐愍（くきょうれんみん）の恩」です。父や母は亡（な）くなっても、いつも子孫を安かれと念じていてくださるのです。父母を忘れての日暮らしがあるとしたら、このいのちを育てて下さったご恩に背（そむ）くことになります。

総本山　永観堂　禅林寺

みかえり　第137号

写真説明　第八十六世丹羽観堂猊下入山の庭儀式

今日の仕事を　明日までのばすな
この時において　励みいとなむべし

―西山上人―

ある人が、大勢のお客に、牛乳をご馳走しようと考えた。しかし、毎日毎日乳を搾るのも面倒だし、また、その牛乳を保存しておくのも厄介だし、腐ってしまう事もある。それでは、いっそのこと、牛のお腹の中に牛乳を溜めておくほうが賢いと思った。そして、実際に来客があってから、乳を搾るほうが得だと思いこんで、毎日乳を搾ることをやめてしまった。

それからしばらくして、来客があった。その人は時来たれりと、早速牛をつれ出し、乳を搾ろうとしたが、ちっとも牛乳が出なかったとさ。

『百喩経』

総本山　永観堂　禅林寺